

フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習

—現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」—

やまだ ようこ

A Curriculum of the Field Work and the Qualitative Method for Psychology:
Interviews and Narratives for “Generative Inheritance of the Tradition in Kyoto”

YAMADA Yoko

本論は、心理学や教育学においてフィールドワークと質的心理学研究法の基礎をどのように実習で教えるか、その教育方法に関する実践報告である。心理学は、広義の実証的方法論を重視する学問であるが、基礎トレーニングとしては観察法、実験法、調査法、面接法が中心で、フィールドワークの方法論は体系立てて教育されてこなかった。またデータ分析の基礎としては、統計法による数量的分析が中心で質的分析法は教授されなかった。しかし、最近、心理学や隣接科学において、人間科学としてのフィールドワークや質的研究法は重視されるようになった(Atkinson 1998, Flick 1995, 南風原他2001, 無藤他 2002, 尾見・伊藤2001, 佐藤 2002, Silverman 1997, 2001, 下山・子安2002, 須藤1996, 高橋他 1998, 箕浦 1999, やまだ 1997, やまだ他 2001など)。教育学においても、文献中心の研究と現場の実践研究が乖離する傾向が強かったので、現場からボトム・アップに研究するフィールドワークの方法が待望されているといえよう。

しかし、従来、フィールドワークは現場で名人芸的に先輩を見習いながら身体で覚えると考えられていたこともあり、どのようなカリキュラムを組み、何を基礎として教えるのか、データをどのように分析するのかという方法や技法が十分に整備されてきたとはいえない。また心理学や教育学では、伝統的にフィールドワークを行いエスノグラフィーを書くことを目的にしていた文化人類学とは、現場も対象もデータ分析の方法も異なるので、同じ方法が適用できるとは限らない。フィールドワークも質的方法も多様化しており、個別領域に適した研究方法を整備し洗練するとともに、教育カリキュラムの整備が必要であろう。

京都大学大学院教育学研究科、教育方法学講座発達教育論分野では、現場心理学の方法論をひとつの特色にしている。1999年度から基礎演習としてフィールドワーク実習の半期授業を開始し、4年間かけてカリキュラムを整備してきた(やまだ他 2000)。他の大学でも同様の試みが始まっているが、互いのカリキュラムを公開・公共化し、心理学あるいは教育学におけるフィールドワークや質的方法の基礎教育の方法論を実践的に検討していくことが重要であろう。

この基礎演習の特色は、次の諸点にある。1) 現場の人々から学んでいく対話的な研究のあり方を強調すること。研究者と現場の人々との対話的關係性は、従来の「研究者(実験者・調査

者)一被験者」の関係性とは根本的に異なる。2)従来のフィールドワーク実習では、フィールドへの入り方や探索的問題発見プロセスなど前半部が重視される傾向にあったが、現場で得た質的データをどのように分析しまとめるか、質的分析方法やまとめ方を重視したこと。3)多様な現場研究のうち、半構造化面接によるインタビュー方法と語りデータの質的方法にしばって技法を具体的に教えること。4)質的データ分析法とデータ統合の方法としてKJ法の基礎を教えること。5)具体的な研究をしながら実践的に学んでもらうこと。実際に自分が関心をもつテーマをもって現場にインタビューに行き、自分のデータと格闘し、報告書にまとめるという「一仕事」の研究プロセスを実践的に学ぶ。基礎技法の習得は、模擬練習で個々ばらばらに学ぶのでは本当には身につかないし、技法は単なる技術の寄せ集めではない。また実際に切実な関心で身をもって学ぶことが重要である。6)個人活動、小グループ(班)活動、大グループ活動(全体講義、全体発表や討論)を効果的に組み合わせて学ぶこと。

以上のように従来のフィールドワーク基礎演習が、フィールドへの入り方や問題発見など探索的部分が強調されたのに対し、この演習では、インタビューのしかた、インタビューで得られた「語り」をどのようにプロトコル化するか、KJ法を用いてどのように分析し総合するかなど質的データを扱う技法を重視するところが特色である。

もちろんフィールドに出かけて問題を発見したり仮説を発見することは、フィールドワークの醍醐味ではあるが、「とりあえずフィールドへ行ってみよう」「フィールドのなかで何かを発見してみよう」という素朴な態度で何かを簡単に発見できるほど現在の学問水準は素朴ではない。初心者の思いつき程度の素朴な問題意識で学問をすることはかなり難しいし、それができるのはむしろ相当のフィールド経験と研究能力を得てから可能になるといえよう。Burgess(1984)はフィールド研究の発展を、「サンゴ礁」から「街路」へ、そして「家」に帰ってきたと表現している。未知のフィールドに単身出かけてそこからじっくり時間をかけて素手で何かを自分でつかみ取って、まるごと記述するという手法は、ふつうの人々がアプローチ困難な特殊なフィールド、たとえばアフリカやアマゾンの奥地やシカゴの暗黒街では有効だったかもしれない。しかし、心理学や教育学の多くが対象とするのは、はじめから「家」、つまり私たちのすぐ身近にある学校や家庭や地域社会であり、すでにある程度細分化した経験や知識をもっているフィールドや人々である。また「フィールドへの入り方」については、たとえば一口に「学校」といっても小学校か中学校か、地域はどこか、どの教科のどの先生にかかわるかなど、個別の事情が大きく左右する。その指導は、卒業論文指導などの段階で個別に行ったほうがよいだろうと考えた。

フィールド・データ分析の質的技法を重視したのは、この基礎演習以前のフィールドワーク教育の経験から、フィールドに入ってデータを得ることはそれほど難しくないが、そこで得られた雑多なデータをどのように分析しまとめたらいいか、その過程で多くの学生が困難に陥ることがわかっていたからである。データ分析は、どのようなデータかによって技法が異なるから、技法は具体的に教えられねばならない。本基礎演習では、今まであまり組織的に教えられてこなかった「半構造化インタビューで得た語りデータ」を質的に分析する手法を学んでもらうことにした。この手法は、ライフストーリー・インタビュー(Atkinson,R.1998;やまだ2000)に適するが、臨床的面接における語りデータ、談話分析や日常会話のデータ、行動観察を言語化したデータ、日誌やドキュメントに書かれた言語データ、質問紙の自由記述で得られた言語データなど、臨床研究、

観察研究，実験研究，調査研究など他のデータ分析にもはばひろく応用できる手法である。

質的データのまとめ方としては，KJ法（川喜田 1967）を取り入れた。KJ法は，グラウンディッド・セオリー（Glaser & Strauss 1967）がカテゴリーづくりに向かうのに対して，図解化を活用して創造的総合としての新しい意味連関をつくることに特色がある（川喜田他 2003）。KJ法を本格的に身につけるには専門的な実習が必要で，この基礎演習では時間的に限界がある。しかし，本を読んだだけでは修得が難しいフィールドワークとKJ法のエッセンスを，自分のテーマとデータに格闘し図解し発表しレポートを書くという「一仕事」を身をもって学べるよう工夫した。KJ法は，発想や討論の方法，問題意識を明確化する方法，本を読んで要点をまとめる方法など，文献を主要な研究手段とする学生においても役立つ方法である。

以上のように，フィールドワーク基礎演習は，生涯発達心理学や発達教育論の基礎教育としてだけではなく，幅広い関心をもつ学生にとっても基礎演習の役割を果たすと考えられる。

本報告の基礎演習は，「フィールドワークKYOTO —伝統の継承と生成」というテーマで，京都の伝統を支え，伝え，創り，育てている人びととのインタビューを通じて学ぶ実習として計画された。教育学部2，3年生のための授業であるが，教官の他に，大学院生もTAとして参画した。「自己がよりよく学ぶためには，他者に教えてみよう」という，実践的・共同生成的学び論をもとに，学部生は「研究方法」を，院生は「『研究方法』の教育方法」を，相互に共同生成的に学ぶ体制をとった。教官と大学院生は，毎回授業前に30分のミーティングを行って，意思疎通をはかると共に，班の進行ぐあいの報告をしながら指導上の問題点を話し合った。カリキュラムの概要は，以下のようである。

＜教育方法学（発達教育論）基礎演習 カリキュラム＞

フィールドワークKYOTO「伝統の継承と生成」： 京都の伝統を育ててきた人びととの対話

- 1 オリエンテーション
なぜ伝統の継承と生成なのか？
- 2 テーマ探索とグループ編成
- 3 フィールドワークの方法論1 問いと研究計画の立て方
- 4 研究計画の作成
- 5 フィールドワークの方法論2 現場を見ること・聴くこと
- 6 フィールドワークの方法論3 インタビューのしかた
- 7 質的データ分析の方法論1 語りのテキストをつくること：ローデータから一次データ（テキスト）へ
- 8 質的データ分析の方法論2 何を意味ある語りとして選択するか：一次データから二次データ，カードへ
- 9 質的データ分析の方法論3 発表レジメ・報告書のまとめ方
- 10 質的データ分析の方法論4 KJ法実習
- 11 質的データ分析の方法論5 KJ法図解による個人発表
- 12 各班の研究発表会
- (13 班の全体報告書，および個人報告書の提出 約1か月後に締め切り)

- (14 お礼のあいさつ)
- (15 班の全体報告書完成)

1 オリエンテーション

(配布資料：1-A カリキュラム計画と日程。1-B オリエンテーション資料*。1-C テーマ探索*。1-D 関連する新聞資料。1-E ブレーン・ストーミングとKJ法の具体的方法。)

(TAのための配布資料：1-F TA用ブレーン・ストーミング指導要項)

*以下、一部の資料を本報告に資料番号とともに載せた。本報告に記載した資料は太字で示す。

1-1 参加者の自己紹介

1-2 オリエンテーション (講義)

カリキュラム計画と日程の説明 (資料1-A カリキュラム計画と日程)。

実習の注意 (欠席・遅刻しない、班活動やインタビューには授業時間外の時間を使うなど。)

オリエンテーション資料 (資料1-B) をもとに、なぜ「KYOTO 伝統の継承と生成」をテーマにするのかについて説明。

1-3 テーマ探索 (集団ブレーン・ストーミング)

テーマ探索資料 (資料1-C) をもとに問いかける。関連する新聞資料 (資料1-D) を読んで考える。

ブレーン・ストーミングとKJ法の具体的方法 (資料1-E, および資料1-F TA用ブレーン・ストーミング指導要項) をもとに、ブレーン・ストーミングの精神とやり方を説明。

「京都の伝統はどのような人びとによって継承され、生成されているか」をテーマに、全員で集団ブレーン・ストーミングをする。

1-4 テーマ探索 (宿題、個人活動)

自分がインタビューしてみたい人々に関して情報収集し、資料を次回に持ち寄る。

オリエンテーションでは、この実習の目的と計画を理解してもらう。まず、全員が簡単に自己紹介をして、のちのブレーン・ストーミングとあわせて、なごやかな雰囲気をつくるとともに、この実習が受け身のものではなく、全員が主体的に発言し参画して行う「対話型」の実習であることを印象づける。

ブレーン・ストーミングでは、実際にできるかどうかをひとまず考えずに、できるだけ発想を柔軟にして、連想的に多様な思いつきを数多く出してもらうことを目的にする。TAには、あらかじめ打ち合わせのミーティングで指導要領を渡してブレーン・ストーミングのしかたを教え、1人に司会者、2人に書記を担当してもらう。

<資料1-B> オリエンテーション資料

フィールドワーク KYOTO ー伝統の継承と生成

京都の伝統を支え、伝え、創り、育てている人びととの対話

1 はじめに <発達教育論 基礎演習>に参加されるみなさんへのメッセージ

「発達教育論 基礎演習」では、上記のテーマでフィールドワークの実習を行います。このゼミでは、現場（フィールド）心理学の方法論を学びながら、京都に生きる人びととの対話を深めていく作業（ワーク）をしていきたいと思っています。市井に生きるひとりひとりの人びとが、すべて私たちの教師です。彼らの「生の声」に耳を傾け、その人生の物語を聴き取ること、そこから書物だけでは得られない「生きた言葉」から魂をゆさぶられるようにして学ぶことができますでしょう。

フィールドワークの合い言葉は、コミュニケーション（communication）、コミットメント（commitment 関わり・参加）、コミュニティ（community 地域共同体）。どの言葉にも含まれる「co-」は、「common（共同の）」を意味します。ひとりひとりが発する個別のオリジナルな「声」を大切にしながら、それを多声化して織物にしていく共同生成作業をすることが当面の目標です。

2 日常生活から「問い」を発すること

学問とは、「問うて学ぶもの」であります。学問にとって、もっとも大切なのは、答えを出すことよりも、問いを発することです。問いの出し方によって、答え方が決まってくるからです。今まで、正解を出すための勉強（強いて勉めること）はトレーニングされても、「問いの立て方」を学ぶ機会は、あまりなかったのではないのでしょうか。

フィールドワークの方法論にとって重要なのは、まず、「問い」を立てることです。それは、日頃当たり前と思って何の疑問も感じないでいる日常生活、ふだん何げなく見過ごしている人間行動を改めて見直し、「あれ？」「ここに、こんなものが？」と気づくこと、「どうして？」「なぜ？」と不思議に思うことから始まります。

3 なぜ「伝統の生成と継承」をテーマにするのか？

3-1 「世代間コミュニケーションとしての教育」を考える。

「親世代」-後の世代（子・作品）を生み育て生命と世代をつなぐ

「子世代」-受け継いだもの（子・遺産）を生かし新たに生成する

「親世代-子世代-親世代」の循環的コミュニケーション 「鶏が先か、卵が先か？」生命の循環性と生成性、変化可能性。

generativity(生成継承性), generate 生み出す, generation 世代 一代 同時代の人々, 親が生まれてからその子が生まれるまでの約30年間。 gene 遺伝子 生成子, genus 類 ジーナス →ジャンル。 geno- 1) 民族, 人種, 種類, 2) 性 3) 生成する

cf 創造 creation 創造性 creativity 独創性 originality, 始まりが明確。

3-2 「世代間コミュニケーションとしての教育」という見方の意義は何か？

1) 教育は、文化の世代間コミュニケーションの問題としてとらえられる。

前の世代が伝承と経験から得た知恵を後の世代に伝えることが教育。(チンパンジーやカラスも道具を使う。個の発見を仲間に伝えられるか。次世代にどのように伝えるか。)

後の世代は受け継いだものを基に、新たに生成することによって人生を生きる。人間は経験を変えていく。そして、再び自己の知恵を後の世代に伝える。

相互の関係、長い時間軸、世代間連鎖、コミュニケーション、生成と変化

cf 「子ども→大人になる」発達や「大人→子どもに教える」教育は、一方向で短期的である。長期的視点に立ち、発達と教育を統合することが重要である。

2) 従来は別個に扱われてきた、家庭、学校、職場、地域などの重層した関係を「世代間コミュニケーション」の問題として統一的に扱うことができる。

家庭： (祖父母-) 親-子関係。

学校： (先輩教師-) 教師-子ども関係。

職場： 熟練者-新参者

地域： 老人-大人-青年-子ども関係

3) 従来の「近代」「学校」「知識」教育への批判的問い返しと、次の時代に生成的に発展させうる新たな

な教育への提案ができる。

ー伝統、徒弟、修業、見習い、しつけ、一人前、秘伝、年功、技など。従来は「保守的」「後進的」「前近代的」とネガティブにみられがちであった概念の新たなとらえ直し。

ーフィールドの知（臨床の知、現場の知、野の知）、身体知、暗黙知、情動的学習

「伝統の生成と継承」を教育の問題と考えたときに、「修行のしかた」「一人前になるまでに何が必要か」「どのようなステップで一人前になるか」「伝統とは何か」「何を受け継ぐのか」「どのように受け継ぐのか」「時代変化への対応」「自分の代で新たに生成したところは？」「次世代への継承は？」などの問題がでてくる。

3-3 なぜ「京都」なのか？

フィールドとしての京都

- 1) 伝統の生成と継承を行ってきた長い歴史がある（知恵の宝庫）
- 2) 古都でありながら現在も生成しつつある生きた街である（生成・持続する力）
- 3) 質の高いものをつくろうとしてきた独自の文化がある（クオリティと誇りの高さ）
- 4) 身近にあるフィールドを知る（自文化、伝統への無知。自分たちの拠って立つ場を知る）

3-4 方法としての対話・コミュニケーション・共同生成

一般的統計や歴史資料ではわからない、他者がここで生きてきた「体験」をここで生きている「私」がていねいに聞くという方法論をとる。この方法は、集合や情報として人間を見るのではなく、人間と人間の生の出会いを重視する教育の原点ではないか？ 「私」と「私」、人間と人間が生身で出会い、コミュニケーションし、対話し、共同生成することによってしか、伝わらないものがある。「生きた知恵」「生きたことば」「生きた物語」を現場で聞き取ろう。

<教科書>

川喜田二郎 1967 発想法 中公新書

<参考書>

中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か 岩波新書

無藤隆・やまだようこ（編）1995 生涯発達心理学とは何かー理論と方法 金子書房

やまだようこ（編）1997 ^{フィールド}現場心理学の発想 新曜社

やまだようこ（編）2000 人生を物語るー生成のライフストーリー ミネルヴァ書房

やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編）2001 ^{フィールド}カタログ現場心理学 金子書房

無藤隆・やまだようこ・麻生武・南博文・サトウタツヤ（編）2002 質的心理学研究1 新曜社

<方法・技法に関する参考書>

Allport, G.W. 1942 The use of personal documents in psychological science. Social Science Research Council. （大場安則訳 1970 心理学における個人的記録の利用法 培風館）

Atkinson, R. 1998 The life story interview. Sage.

東山紘久 2000 プロカウンセラーの聞く技術 創元社

保阪亨・中澤潤・大野木裕明（編）2000 心理学マニュアル 面接法 北大路書房

Langness, L.L. & Frank, G. 1981 Lives: an anthropological approach to biography. Chandler & Sharp Publishers.

（米山俊直・小林多寿子訳 ライフヒストリー入門：伝記への人類学的アプローチ ミネルヴァ書房）

尾見康博・伊藤哲司（編）2001 心理学におけるフィールドワークの現場 北大路書房

佐藤郁哉 1992 フィールドワーク 新曜社

佐藤郁哉 2001 フィールドワークの技法 新曜社

Schatzman, L. & Strauss A.L. 1973 Field research. Prentice-hall, Inc. （川合隆男監訳 1999 フィールド・リサーチ：現地調査の方法と調査者の戦略 慶應義塾大学出版会）

須藤健一（編）1996 フィールドワークを歩く：文化系研究者の知識と経験 嵯峨野書院

箕浦康子 1999 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房

高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一（編）1998 人間科学研究法ハンドブック ナカニシヤ出版

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）2001 心理学研究法入門 東京大学出版会

中澤潤・大野木裕明・南博文（編）1997 心理学マニュアル 観察法 北大路書房

＜関連書＞

本多勝一1980 ルポルタージュの方法 すずさわ書店

立花隆 1998 二十歳のころ 新潮社

＜さらに勉強したい方のために＞

Burgess, R.G. 1984 In the field: An introduction to field research. Routledge.

Emerson, R.M., Fretz, R.I., & Shaw, L.L. 1995 Writing ethnographic fieldnotes. The University of Chicago Press. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳 1998 方法としてのフィールドノート: 現地取材から物語作成まで 新曜社)

Glaser, B.G., & Strauss, A.L. 1967 The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research. Aldine Publishing. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳1996 データ対話型理論の発見 新曜社)

Silverman, D. (Ed.) 1997 Qualitative research: theory, method and practice. Sage.

Silverman, D. 2001 Interpreting qualitative data: methods for analysing talk, text and interaction. 2nd.ed. Sage.

＜資料1-C＞ テーマ探索

＜問1＞ 京都には多くの伝統が残されています。伝統というと、どういうものが思い浮かぶでしょうか？ 数分、考えてみてください。

→各自の発表

→ノートに記す（フィールド・ワーカーは記録魔になるべし。事実の記録、考えのヒント、他者の意見、あらゆることを即ノートすること。「あとで」は禁物。時間がたつと、想できる情報量は激減する。昨日の自分は他人と思え。フィールド・ノートは必需品。大きさ、体裁などは各自の好みでよいが、手ぶらで歩いてはいけない。事件記者か新聞記者になったつもりで、関係しそうだと思うなら、とにかく何でも書いておこう。まず、書く習慣をつけること。これは、フィールドワーカーにならなくても、将来、必ず役立つ自己学習の方法である。ノートするという習慣をまじめに身につけたなら、いつかきっと、あなたは、この演習に出会ったことを感謝するだろう。）

→具体例の新聞資料を読む

＜問2＞ 京都の伝統を継承・生成している「場所・人」にはどんなものがあるでしょうか？ 思いつくものをすべて、あげてください。

→「ブレンストーミングの手順」資料、説明

→ブレンストーミング 実習

→提出されたアイデアをすべて記録

＜問3＞ 伝統の継承と生成には、伝統を前の世代から受け継いでいく働き（教え、学び、修行）と、伝統を受け継いで自己のものとして（消化、納得、自己化）、新たなものを生成し次世代を育てていく働き（育成、伝達、生成、工夫、創造）などが複雑なダイナミズムでからんでいると考えられます。インタビューを通じて「伝統の継承と生成」を考えること、これがゼミ全体で取り組む大きいテーマです。

この大きいテーマに関連して、あなたなら、どのようなフィールドの、どのような人々に話を聞いてみたいですか？

→次週までの宿題。自分がやりたいものを、できるだけ具体的に探索・調査して、その資料を次週までもってくる。次週は、その発表をもとに、班を構成し、テーマをしばらく、研究計画をつくる作業に入ります。（電話帳、ガイドブック、知人に聞く、ホームページ、ネットワークなど、あらゆる情報収集法の幅広い活用）

2 テーマ探索とグループ編成

2-1 各自の情報収集結果の発表（全員発表）

各自が宿題で調べてきた自分のやってみたいテーマやインタビューしてみたい人について発表し、他の人たちが何を考えているか、情報の共有を行う。

各自の発表のあとで短時間の簡単な質疑応答を行う。

2-3 班構成

参加者が発表内容をもとに自主編成。約5班程度の班をつくる。＊各班に教官かTAがつく。

2-4 大きな研究テーマの設定 (班活動・班レポート宿題)

各班に分かれて、班の構成員リストと班長を決める。各班で何を研究テーマにするか討論し、その結果をA4一枚のレポートにまとめ、次回全員に配布できるように準備する。

班はお互いに話し合っって自主的に班を構成してもらう。「班は実際にインタビューに出かけるグループそのものではない。実際に出かけるのは、1人あるいは2人など、さらに小さいグループに分かれるので、実際に行きたいところが違う人どうしても班を構成できる」ことを説明しておく。また、「班の数は、教官やTAの人数も考慮して、およそ5班程度にしたい」「1人では班といえないので、最低でも2人以上で班をつくってもらいたい」という目安を示しておく。

班の構成のしかたは、比較的似たことを考えている人たちが集まる場合もあるし、他の人の発表を聞いていておもしろそうだから自分もやってみたいと思う場合も、人間関係で集まる場合もいろいろある。あくまで学生たちが自主的に話し合っって主体的に満足できる班を構成してもらうことが重要なので、教官やTAは班構成には積極的にはかかわらないが、場合によって相談にのることはある。班ができたら、順番に班名を割り振る。TAや教官が各自の関心をもとに各自が担当する班を決める。

各班に分かれて、班の構成員や連絡先を確認し、班リーダーを決める。各班でどのようなテーマに実際に取り組みたいかを討論する。これらの内容を翌週にレポートとして全員分コピーして提出する。以後毎回、各班の話し合いや進行は、レポート(A4、1-2枚程度)にして全員に配られる。時間の制約によって毎回各班の発表を聞くわけにはいかないが、並行して配られるこのレポートを読むことによって各班の進行を把握し、学生たちも互いに他の班から学ぶことができる。テーマや行きたい場所や人はこの段階ではあいまいであり、その後何度も練り直されるので、初めとは大きく変わってしまうことも珍しくない。テーマが変わっても班の構成員は基本的に固定するが、3回目までは途中での変更や追加を認める。

<各年度に実施されたテーマと班構成>

(ここに記したテーマは、最終報告書の段階のものである。各班のなかでさらに1-3人の小グループに分かれてインタビューを行った。＊は実際に行われたインタビュー相手の人数である。)

1999年度

- 1班 和菓子における伝統の創造・引継・伝達(学部生3人+院生)＊3人
- 2班 町家に住む人々の生活―住めば都の家意識(学部生4人+教官)＊5人
- 3班 時代とともに生きる先斗町(学部生3人+院生)＊1人
- 4班 学生街で喫茶店を続けるということ(学部生3人+院生)＊2人
- 5班 お寺における世代の継承―過去から現在、現在から未来へ(学部生2人+院生)＊1人

2000年度

- 1班 西陣織における技術とこころの伝承—手織職人に聴く（学部生4人+院生）＊2人
- 2班 舞妓の修業時代—「憧れ」から「誇り」、「自信」へ（学部生3人+院生）＊2人
- 3班 保津川下りの船頭における親から子への伝統と技の継承
—船頭の修業時代（学部生4人+院生）＊3人
- 4班 和菓子職人のライフストーリーおよび伝統と美の世代間伝承（学部生6人+院生）＊3人
- 5班 お香ブームをどう考えているのか（学部生5人+院生）＊2人

2001年度

- 1班 伝統的な和菓子産業における経営継承の意味付け
—大規模店と小規模店での違いを探る（学部生6人+院生）＊2人
- 2班 時代と共に歩み続ける舞妓さん社会（学部生5人+院生）＊4人
- 3班 背中から学ぶ伝統 —精神の継承（学部生3人+院生2人）＊4人
- 4班 僧侶育成の心 一次の世代に何を伝えるか？（学部生3人+院生）＊3人

2002年度

- 1班 祇園祭り—人と町の伝統と継承（学部生2人+院生）＊1人
- 2班 錦市場における「日常と伝統」に関する研究
—「わたし」と錦市場のかかわりからの考察（学部生2人+院生）＊2人
- 3班 宇治茶の新しいカタチをさぐる（学部生3人+院生）＊1人
- 4班 町家にみる伝統の継承と生成（学部生4人+院生）＊5人
- 5班 老舗パン屋Sにおける規模縮小と伝統理念の関係（学部生2人+院生）＊1人

3 フィールドワークの方法論1 問いと研究計画の立て方

（配布資料：3-A 問いをたてる 3-B 研究計画の立て方 3-C 各班のレポート）

3-1 問題の立て方（講義）

「問いの立て方」「研究計画の立て方」について講義する。フィールドワークに限らず、研究においてもっとも重要なのは、どのような問いを立てるかということである。また、「研究計画の立て方」についても講義し、基本的な様式を教える。

3-2 研究計画のうち「問題と目的」に関する討論。

討論の結果をレポートにまとめ、次回に配布する。（班活動・宿題含む）

班ごとに自分たちの研究計画のうち、「問題と目的」について具体的に討論し、次週にレポートを提出する。「目的」は、実際にどこで誰にインタビューするかという「方法」と切り離して考えることはできないので、方法についても考えながら「目的」を討論する。以下、具体的な討論においては、TAのサポートが大きな役割を果たす。また、教官はすべての班をまわって個々の班に即して具体的にアドバイスする。

3-3 次週までに「方法」を考えておく。（宿題）

<資料3-A> 問いをたてる

3-1 「学問」とは？ 問うて学ぶこと

＊答えの出し方よりも、どのような問いを立てるかが重要である。

「私に提供できるのは、ものの見方 (a way of looking at things) 以外に何もないのである」(エリクソン)

それぞれの人が、自分自身の人生において、「私に提供できること」がある。人生の先輩から、それを聴いて学ばせてもらう。現場（フィールド）において、生きた学問をする。人間の「生」(lives 生活・人生・生涯・いのち)の多様性と不思議を知る。

3-2 何を学ぶか

＊学び方、学的探求のしかた。方法論の重要性。

方法論は単なる技術ではない。応用がきくのは、知識や技術よりも、学問の方法論である。方法論を学べば、知識や技術は新たに自分でどんどん学んでいくことができる。方法論は学問観や生き方と密接に関係する。

＊関与しながら知る。対話的に知る。実践的に身交いあう（むかいあう）認識のしかた。

方法論は机上で身につくものではない。現場で身をもって対象と関与し、相手（対象ではない）の活動に参加しながら実践的に学んでいく必要がある。

そういう彼の意識は、現実生活から浮上して、その内容を紛失していた当時の儒学を見て、若いときから鋭いものになっていた。...そこで、彼には、これを他人事のように、あるいは済んでしまった事のように語るのが、どうしても出来ないということになった。...それは対象化されて整理されるのを拒んでいたと言える。

人生を物語と観じて、よみならふという一種の眼力を錬磨しない者に、人の道を説くことはできない、...「世の有さま、人の心ばへをしりて、物の哀をしる」という人生の知り方、人生の「こころ」を知るという知り方が、彼の学問の基本的な方法なら、学問は、彼自身に密着せざるを得ないだろう。（小林秀雄『本居宣長』）

僕はもう知識の上で、フランスをもっと複雑に知ろうという気持はなくなった。それはきりがいいことだし、またその知識は時が経てば古びてしまうだろう。そうではなくて僕の気持そのものが、内面的に、文明ということの水準に相応わしく、活動しなければならぬという自覚である。...そのことを考えの上では、僕はとうに知っていた。僕が東京にいた時、パスカルやドストエフスキーを勉強してえた結論もそれにほかならなかった。しかし、この態度が僕自体のものとなるためには、どれだけの痛ましい経験が必要かということを僕は知らなかった。自分が変わることが必要なのだ。単に冷たく相手を客観的に知ることでもなく、また自分の意欲を基礎にした主観的熱情で、相手が自分のものになると考えることでもない。（森有正 『バビロンの流れのほとりにて』）

3-3 研究目的（問いの種類）

- <実践> ...のためには、どうしたらいいか？（現状の変え方を知る）
- <現象記述> ...は、どのようなになっているか？（現状をありのままに知る）
- <モデル（仮説）構成> ...は、.....ではないか？（最終的に仮説やモデルを提示する）
- <検証> もし... なら、AかBか？（因果関係を知るために条件分析をする）

3-4 問題意識の整理

- 1) 「？」をできるだけ多くあげる。（拡散的問い）
- 2) 何（誰）に焦点をあてるか考える。（探求的問い）
- 3) 何を何のために誰から知りたいのか、できるだけ具体的で明確な問いにする。（しぼる、明確化）
- 4) 今回の目的を1つ（2つ）にしぼり、理論的な論点を明確にして、それが明確になるように研究目的

を作成する(リサーチ・クエスチョン)。仮説を立てて、異なるグループに分けて比較をして、各群で結果がどうなるかを予測してみるとよい。

1) まず、いろいろな夢やヴィジョンやアイデアをできるだけ広く豊かにたくさん考える。2) そのあとで、どれだけ捨てられるか。捨てること＝主体的に選択すること。3) できるだけ具体的に。明確に目的をしぼる。目的と仮説があって、はじめて、そうではなかったことも発見できる。ありのままの観察はありえるか? ばくぜんとした無目的な観察、拡散的な観察、何でも見てやろうという観察も必要である。目的からはずれたものを見聞きする好奇心とあそびの精神も重要である。しかし、多くの研究は、そのあとの探求の観察からはじまる。「よく見る」ためには、見ようとする意志と何を見るかという目的を明確にしておくが必要である。

<日常の問いと、学問研究の問いとの違い>

*「しぼる」きりきりとしぼってつめて、最終的には一番知りたいこと、今回具体的にできることに限定する。目的を1つにしぼる。

*「無知の知」自分が知ることができることは、ほんのわずかにすぎないことがわかること。わずか1回の研究で、あれもこれも欲張って知ることはできない。学問をすればするほど自分がいかに知らないか、自分の限界がわかってくる。それとともにまだまだ知らないことが多いことがわかって、世界がますます広がって探求心がかきたてられる。

cf) 子どもの全能感。

*「二兎を追うものは一兎も得ず」1つの探求でわかるのは、せいぜい1つ。けれど、それが確実にわかることは凄いことだ。

*「積み上げ」学問の歩みは一面では、地道に積み上げて知っていくプロセス。1つわかれば(わからなかったということがわかってもいい)、それを踏み台にして、次のステップへと段階を踏んで計画を立てることができる。しかし、何をやって何がわかったかあいまいであれば、段階を踏んで積んだり、問題をさらにしぼって焦点化していくことができない。先人が積み上げた研究の蓄積の上に、自分が積み重ねていく。(先行研究を謙虚に学ぶ必要性)

cf) もう一面では、学問は積み上げではないプロセスですすむ。新しいアイデアは、飛躍や遊びのなかから生まれる。

<資料3-B> 研究計画の作成

今週は、自分たちの班の問題と目的を明確にする。各班の討論をふまえて、各班ごとに、問題と目的をできるだけ詳しく書いて次週に提出、発表する。

(班の話し合い。次の様式の研究計画のなかで、「問題」と「目的」を討論して明確にすること。次週は「方法」を具体化して研究計画を作成するので考えてくる。同時に、次週までに誰にインタビューできそうか具体的に調べてめどをつけておく。) 以下、次のような形式でレポートを書く。

<研究計画の構成>

題

題は研究のエッセンスである。自分たちの研究内容にふさわしい題をつける。「..の研究」など漠然としたタイトルではなく具体的で明細がタイトルだけでわかるようにする。必要に応じてサブタイトルをつける。

班名 班員の名前 レポート提出の日時

1 問題、目的

何のために何を研究するか。大きな問題設定をする。

目的は、この研究で何を調べるのか、できるだけ具体的に考えて明確にする。

仮説を立てて、異なるグループに分けて比較をして、各群で結果がどうなるかを予測してみるとよい。

2 方法

(1) 目的に合わせてインタビュー相手を決める。

誰に、-被面接者(話し手)・面接者(聞き手)

いつ、どこで、どのような方法で聞くか。

(相手との交渉のしかた、手順、役割分担、用意する道具など、できるだけ詳しく考える)

(2) 何を質問するか。

(質問項目をできるだけ詳しく考えて記述する)

3 結果

4 考察

4 研究計画の作成 (班活動)

(配布資料：4-A 昨年度までの基礎演習全体報告書 4-B 各班のレポート)

4-1 研究計画の作成 (班活動)

他班のレポートや、昨年度までの先輩がつくった報告書も参考にしながら、各班で目的と方法を討論する。TAは自分の班の討論に加わり、教官は各班をまわって具体的にアドバイスする。

4-2 目的・方法の具体化 (班活動・班レポート宿題)

実習時間をすべて班活動にあてて、班ごとに研究計画を具体的に作成する。この段階に入ってはじめて昨年度までの報告書を各自に配り、先輩のやったことを参考にする。通常の研究スタイルでは、先行研究を学んでそこから問題を考えることも多い。しかし、この実習では、学問的な問題を継承して発展させていくことまでは求めていないので、テーマの学問としての意義や価値は問わない。テーマとしては、とらわれのない自由な発想でやりたいことをやるという好奇心を重んじる。問題を考える段階までは安易な模倣をさせて、自分たちの頭であれこれと行きつ戻りつ考えてもらいたいのので、昨年度までの実績はいっさい参考にしない。しかし、班ごとにある程度やりたいことのイメージが具体化した段階では、研究計画の立て方や書き方などは、試行錯誤をするよりも具体例があったほうが学びやすい。また、研究計画の立て方では、まず基本の型を学ぶことが重要である。

同時併行して配られる各班のレポートは、班の進行状況を知るために役に立つ。毎回出される班のレポートは、だんだん精密に具体的になっていくので、自分たちの班の話し合いの結果と進行プロセスを記録する役割をもち、最終報告書を書くときに役立つ。また他班のレポートは、互いのモデルになったり、励みになったり、競い合ったり、多様な機能を果たす。班によって、進行やレポートの内容や書き方のレベルにかなりの差ができるが、進んでいる班や良いレポートを提出する班が、暗黙のうちに他の班に刺激を与えてひつばる役目をする。

1 目的をしぼる。

できるだけ具体的に。明確に目的をしぼる。目的と仮説があって、はじめて、そうではなかったことも発見できる。ありのままの観察はありえるか？ばくぜんとした無目的な観察、拡散的な観察、何でも見てやろうという観察も必要な時がある。しかし、研究は探求的観察によって成立する。「よく見る」ためには、見ようとする意志が必要である。ただし、目的をもち、目的から出る柔軟さ、目的からはずれたものを見聞きする好奇心とあそびの精神も重要である。

2 方法を具体化する。

(1) 目的に合わせてインタビュー相手を決める。

実際の交渉。「誰に」被面接者(話し手)・面接者(聞き手)「いつ、どこで、どのように」(相手との交渉のしかた、手順、役割分担、用意する道具など、できるだけ詳しく考える。)

5 フィールドワークの方法論 2 ^{フィールド}現場を見ること・聴くこと

(配布資料: 5-A ^{フィールド}現場を見ること・聴くこと 5-B 文献、やまだようこ「モデル構成のための現場心理学の方法論」(『現場心理学の発想』新曜社より) 5-C アポイントメントのとり方 5-D 各班のレポート。)

5-1 ^{フィールド}現場を見ること・聴くこと (講義)

5-2 アポイントメントのとり方 (講義)

5-3 方法の具体化 (班活動・班レポート宿題)

昨年度までの全体報告書を参考にして、質問相手ごとに、できるだけ詳しい質問項目を具体的に考える。

5-4 インタビュー相手先との交渉 (宿題)

この段階から大学での基本的な講義や班の討議と併行して、いよいよ具体的にインタビュー相手を探して現場へ出て行くことになる。インタビュー相手を探すことは学生が自分たちで行う。教官やTAはアドバイスはするが、具体的に知り合いの誰かを紹介することはしない。インタビュー相手を探す過程で、いろいろな現場にまずぶつかることになるし、いろいろな人に聞いたり、助けてもらったりしなければならないが、そのプロセス自体が勉強になる。授業では、基本的な概念などの講義も重要だが、現場でのふるまい方を役割演技など含めて実践的に指導しておくことも重要である。相手の方に失礼がないように、電話のかけ方やことば使いについても注意する。

方法の具体化においては、班ごとにどこで誰に話を聴くかを具体的に考えて、ふさわしい相手を探す。インタビューには、基本的には1人か2人で出かけるように計画を立てる。聞き役の人数が多くなりすぎると、相手が威圧感を感じて話しにくくなるし、聞き手のほうも単なるフォロー役になる者がでてくるからである。自分が相手に質問しなければならないと思って主体的に研究計画を考えるのと、誰かがやってくれるからと受け身になってしまうのとでは、実習への取り組み方が大きく違ってくる。すべての学生が主体的に取り組める計画になるようにアドバイスをする。

<資料5-A> ^{フィールド}現場を見ること・聴くこと

<^{フィールド}現場とは?>

野・場・場所 → トポス (時・空間) トピックス (話題)

統合された全体的場 (←分けること 分断・分割・分析)

現場・現に、今、共に生きている場

生成・変化 意味生成, 共同生成, 共に変化するプロセスの記述

<観察とインタビューの方法>

- 1 よく「みる」ということ よく見れば ^{なるすな} 齊花咲く垣根かな (芭蕉)
見る 視る 観る 看る (世話する, 見守る)
see look, watch observe look after
(調べる 判断する 見積もる)
examine judge calculate
- 2 よく「きく」(傾聴)ということ
聞く 聴く 問う 効く
hear listen, learn ask, inquire
傾聴 (深く耳を傾ける), 無心 (価値判断をしない), 共感的理解 (同情ではない)
- 3 communication
共通のものをつくる営み (←単なる情報伝達 information ではない)
(インタビュー相手は, 情報提供者informantでも, 被験者subjectでもない。)
commitment
かかわる 関与・参与 → participation 参画 (仏語 融即) participant → involvement
community 人は個人ではなく, 共同体のなかに生きている (cf. society)
(参考資料 やまだようこ 編 1997 ^{フィールド} 現場心理学の発想 新曜社)
- 4 なぜインタビューなのか? なぜ「私」が, 他者に「私の経験」を聞くのか?
「私」を含む観察と記述の重要性。
1) 主観と客観の二元分割に対する批判。「私」を含まない観察が「客観的」と考えてきた科学。「私」の位置にかかわらず, ものが実在するか? 観察者の位置の重要性。(星の観察。見えているから存在するといえるか?) 人間科学の対象はモノではない。「私」も「相手」も人間であるから, 観察もコミュニケーションである。人間を観るとき, 傍観者として, 外に立つ観察が可能か? 有効な知恵をひきだせるか?
2) 理論(基礎)と実践(応用)の二元分割に対する批判。「私」を相手にコミットさせる, かかわることによってのみ知ることができる。参加観察。アクティヴな知。フィールドの知。
3) 誰にもいつでも普遍的に通用するとみなす, 一般的, 無限定的「普遍化」への批判。
文化相対主義。文脈主義—文化・歴史・社会的文脈。ジェンダー論。認知科学における領域固有論。「私たち」という限定。
4) 一般的統計や歴史資料ではわからない, 生きた「私の体験」を生きた「私」がいてねいに聞くという方法論, この方法は, 教育の原点ではないか?
「私」と「私」, 人間と人間が生身で出会い, コミュニケーションし, 共同生成することによってしか, 伝わらないものがある。生きた知恵, 生きたことば, 生きた物語を聞き取る。

<資料5-C> アポイントメントの取り方

- 1) 電話をかける。(できるだけ, 丁寧なことばで, ゆっくりと)
- 2) こちらの名前と所属を名のる。(私は...と申します。お忙しいところ失礼しますが,...。)
- 3) 目的と所用時間など必要事項を説明する(無理はしない。ただし簡単にあきらめない。熱意と誠意と下調べ。まず話だけでも聞いていただけませんか?) (双方その気になる, その気にさせるのも技のうち。共に楽しむ共同生成)
- 4) アポイントメントをとる。日時, 場所, 連絡先(双方)を確認してメモする。変更などが生じたとき, すぐに連絡がとれるようにする。
- 5) 必要事項を確認する。倫理的な内容を確認する。授業(学術的な目的)で行う。伺った内容は匿名化する。個人的に迷惑をかけることはしない。
- 6) お礼をのべる。

6 フィールドワークの方法論3 インタビューのしかた、インタビューの実施

(配布資料：6-A インタビュー・マニュアル 6-B フェイスシート 6-C インタビュー先への教官の依頼状(趣意書) 6-D 各班のレポート。)

(配布物：各インタビュー相手ごとに用意。6-E インタビュー先への教官の依頼状と封筒。6-F インタビュー先に持参する謝礼(図書券、相手によっては別の品に代える。)

6-1 インタビューのしかた(講義とVTR)

6-2 研究計画の完成(班活動)

6-3 インタビューの実施計画と質問項目の作成(班活動・班レポート宿題)

6-4 インタビューの実施(宿題：班のなかのインタビュー・グループ活動)

インタビューのしかたを、講義と実際の場面を収録したVTRとインタビュー・マニュアルで説明する。その後で班ごとに方法をさらに具体的に。各班でフェイスシートを準備し、「何を質問するか」の質問項目を考える。実際のインタビューの質問は、一対一対応的に聞くのではなく、相手の話の流れに合わせて臨機応変に聞いていく。しかし、想定した質問項目をできるだけ多く考えて書き出し、できるだけ準備をしておくことが必要である。質問項目の準備をすることによって、何をめざした研究なのか、何と何は聞いておかねばならないか、目的もよりはっきりしてくる。また、これだけは、最低限聞くことを明確にしておき、話のなかに出てこなかったときには、後で追加して聞く。

<資料6-A> インタビュー・マニュアル

<インタビューに持参するもの>

- 1) テープレコーダ(必要ならテープ、電池ともに借り出す)
- 2) テープ、電池(いずれも予備を持参)
- 3) ノート
- 4) インタビュー・マニュアル
- 5) フェイスシート(必要枚数をコピー)
- 6) 依頼状とお礼(1000円図書券。相手によってお菓子など適当な品に代える)
- 7) 各班でつくった目的や質問項目のまとめ

<インタビューの導入>

- 1) 導入のあいさつ 「お忙しいところ、お時間を取っていただきありがとうございます。」
- 2) 聞き手の自己紹介 大学、所属、名前 など。
- 3) インタビューの目的〔ごく簡単に〕

「現在私たちは、京都大学教育学部のゼミで『フィールドワーク KYOTO』というテーマで伝統・文化の継承と生成について調べております。」「私たちの班では、_____ (和菓子作り、町屋、先斗町など)に関心を持っております。そこで、_____ (名前)さんにお話を伺えれば大変ありがたいと思います。」

- 4) 依頼書(趣意書)の手渡しと確認

「これは、教授から預かってきたものですが、お目通しいただけないでしょうか。」

5) 依頼書に含まれている内容だが、重要事項だけ口頭でくりかえす。

「個人名や店の名前など、プライバシーに関わる内容は出しません。」「お話下さった内容を研究以外の目的で使用する事はありません。」「さしつかえない範囲でお話下されば結構です。」「ご迷惑をおかけしないようにできるだけ配慮をいたします。もし何かご意見がありましたら、お知らせください。」

6) テープレコーダ使用の許可を得る。「テープレコーダに録音させていただいてもよろしいでしょうか。」許可が得られない場合には、「研究のためには、できるだけ正確な記録が必要なので、何とかお願いできませんでしょうか」ともう一度頼んでみる。それでも許可が得られなければ、無理に頼まない。ノートに書き取ることにする。

<インタビュー時>

インタビューのときは、できるだけ相手の目を見て、記録よりも話を聞くことに集中する。話の流れを大切に、興味をもってあいづちを打ちながら聞く。具体的な年号や場所や人名などはノートにメモする。漢字などがわからないときは、話を中断しないタイミングで聞いて確かめておく。テープレコーダー記録だけに依存すると、あとでわからないことがある。

フェイスシートは、相手に書いてもらうのではなく、あとで自分で書く。フェイスシートの内容や質問項目は、できるだけ覚えておいて、さしつかえない範囲で聞く。また、話のなかに出てこなかった場合に補足で聞く。

<インタビューのしめくり>

協力に対するお礼をていねいに述べてお礼をする。お礼の品を渡す。「人生の先輩から学ばせていただいた」という謙虚な気持ちと、「ありがとうございました」という感謝の気持ち、話し手も聞き手も「よかった、いい経験だった」と思えることが大切なので、それが相手に伝わるようにする。

<インタビュー後の作業>

1) インタビューが終わったら、印象も含めてすぐに主な話の内容、気づいたことなどをノートに書いておく。時間がたつと急速に記憶がうすれる。1日たつと、思い出せる内容は少なくなる。「昨日の私は、今日の他人。」フィールドワーカーはメモ魔になるべし。

2) できるだけ早くテープ起こし(機器は借り出す)をして、逐語プロトコルをつくる。

書くことを職業にしている記者や作家などは、フィールドワーカーと同様に、見たこと聞いたことを「書く」努力をしている。頭のなかにばくぜんと思いつくことと、それを記述することとのあいだには、雲泥の差がある。書くことによって、世界を意識化していくことになる。書くことは、単なる記録の道具にとどまらず、さらに発見したり思考するための道具である。

「ヒトは言葉を書きつけることで、この宇宙の最大の王『時間』と対抗してきた。...わたしたちの読書行為の底には、『過去とつながりたい』という想いがある。そして文章を綴ろうとするときには、『未来とつながりたい』という想いがあるのである。」 (井上ひさし 1984『自家製文章読本』新潮社)

<資料6-B> フェイスシート

< 年 基礎演習 インタビュー・フェイスシート>

(実際のフェイスシートは、直接書き込める様式で余白を入れてつくられている。)

*それぞれの相手に応じて変更して下さい。

*フェイスシートは基本事項を客観的におさえておくために使います。本人に書いてもらうのではなくこちらで記入し、補足が必要な部分だけ、さしつかえない範囲で話のなかで適時聞くこと。すべてを埋める必要はありません。

I 聞き手について

- | | | |
|--------|-----|-----|
| 1 名前 (|) (|) (|
| 2 所属 (|) (|) (|

- 3 調査年月日 1999年 月 日
4 場所 ()
5 時間 時 分 ~ 時 分
6 面接 () 回目
- II 話し手について
- 1 名前 () 2 年齢 () 歳 3 性別 男 女
- 4 身分・職業
学生の方は… () 大学 () 研究科 () 課程 () 回生
社会人の方は…
学歴 [わかれば] ()
職業 ()
職種 [内容を具体的に] ()
経験年数 () 年
修行場所や形態 ()
- 5 インタビュー対象となる職場について (お店、お寺など…)
名前 ()
場所 ()
創業年数<継続年数> () 年
従業員数<従事者> () 人
規模
6 出身地 [主に育ったところ] ()
7 現在の住まい ()
8 現在の家族形態 ()
9 その他、必要と思われる事項

7 質的データ分析の方法論1 語りのテキストを読むということ

(配布資料：7-A ローデータから一次データへ)

7-1 語りのテキストを読むということ：ローデータから一次データへ (講義)

7-2 テープ起こしのしかた (機器のデモンストレーション)

7-3 インタビューの実施 (宿題：班のなかの各インタビュー・グループ活動)

7-4 インタビューのプロトコル化 (宿題：テープ起こし、一次データ：プロトコル・テキスト作成)

以下、インタビューの実施とプロトコル化のプロセスは、各グループによって速度が異なるので、一部並行作業としてカリキュラムに記述している。

ここでは録音テープをローデータと呼び、それを逐語に起こしたテキストを一次データと読んでいる。一次データを愚直なまでに丁寧に書き起こし、信頼できるデータとして作成することを重視している。一度信頼できるテキストを作成しておけば、何度でも一次データに戻ることができるし、他者とデータを共有することもできる。一次データがきちんと作成されていないと、あとで疑問がでたときや分析し直すときに、再びテープを聞き直す必要がでてきて、かえって時間が無駄になる。丁寧に謙虚に地道にありのままのデータと付き合うことが何よりも大切である。

<資料 7-A> ローデータから一次データへ

1 ローデータ（録音テープ）から一次データ（一次テキスト）へ

インタビューを終えた後、テープに記録された音声を逐語的におこしてテキスト（文字記録）にする。録音テープ（ロー・データ）から言語化されたものを、一次データ（一次テキスト）とする。

基本的には、テープに録音されている発話はすべて文字記録に変換する。句読点や読点や疑問符は、内容によって適時入れる。意味の聞き取れない音声は「ア-」など擬音で記すか「不明」として記す。

一次テキストの作り方や精緻さの程度は、研究目的によって異なる。エスノメソドロロジーや談話分析では、定型化された規則がある。ここでは語り口やターンや抑揚などが分析対象ではなく、語り内容の分析が中心なので、内容の読みやすいテキストにすることが重要となる。

声の表情など特記すべきこと、及び記憶に残っていたりメモに残っている非言語的(ノンバーバル)な情報や状況等は、()に入れて書き込む。(例えば、笑い、10秒程度の沈黙、振り向いて両手をあげる、立ち上がりながら、写真を見せる、写真の顔を指さすなど)

1) この段階では、ルポルタージュなどとは異なり、聞き取ったことをこちらの目的にあわせて選択して書くのではなく、ありのままのデータを、できる限り全部書き起こす。データそのものから謙虚に学ぶことが重要である。

2) 言語化した一次データは、身体に「語り」がしみ込むまで繰り返し読み込む。

2 一次データのサンプル (川喜田・松沢・やまだ2003の一次データより)*

聞き手M, 語り手K

M: そうすると、やっぱり、4, 5日というね、「混沌」という対象が都解²⁴の村だとして、4, 5日という時間的な制約のもとに、数十枚の現場で取材したものを書き付けたものが資料としてあがってきて、それをこうやると、当然、時間的な制約もあって、こうやって配置してみると、こういうところが抜けてたよな、と。やっぱり二次、三次の調査をこの点についてやらなきゃいけない、と、ということが当然あるでしょうね?

K: 当然出てくるんです。それはね。ファンタスティックに出てくるかしらんですがね。これは根拠のあるファンタスティックなんです。それはね、そんなんでね、結局ね、この、これ出てきた。そのときは僕は、「これは混沌は乗り越えられる。それは自分をデータに押しつけることではないと。データに従うのだ」とっていうことですわ。それを今から思うとひらめいたんですな。ひょっとするとね、混沌というお化けはね、解決できるかも分からない。それじゃ、トップダウン型のまとめ方しちやいかんのよ。ボトムアップ的のまとめ方をしなければならぬ。というふうなんです。さあそれから、私はこれは大喜びですわ。そんな簡単にうまいこといくかないな。数十枚をずーとやってたんです。そしたらそれに関する考えが見事にまとまった。急によくまとまった。さあそれからうれしくなったから、で1951年に。あと、1953年にはじめてヒマラヤへ行くことになった。そのときはもう、帰ってきたらデータね、この要領でやろうと、いう。

M: 行く前から決まっていた? 行くときにその、図書館カードを持っていた?

K: そのときはね。あの、フィールドノートにね、書き付けるという、今までどおり。それを持って帰って、そして、しかるべきカードに移し替えようと思ってたんです。今から考えるとバカなこと考えてた。手間のかかる。ずいぶん帰ってから時間かかったですよ。なかにはアルバイトの人、お願いしてまで、汚いノートから書いてもらったものもあったけど。ここからこまで一枚分とうまく言っただけで、これできない。それを丹念にやった。だけどそれやったら、ヒマラヤ行っただけ一回分が、何ヶ月かのデータ、全部収まった。それでそれをまとめたのが、・・のなかで。あるチベット人の集落だけに私が集中的に滞在調査したんです。それはそういう自信があったからできたんです。(以下略)

(*実際に講義で使用したサンプルは、講義によって変化している。)

8 質的データ分析の方法論2 何を意味ある語りとして選択するか？

(配布資料：8-A テクストの加工：一次データから二次データへ 8-B 何を意味ある語りとして選択するか？：二次データからカードへ)

8-1 テクストの加工：一次データから二次データへ (講義)

8-2 何を意味ある語りとして選択するか？：二次データからカードへ (講義)

8-3 インタビューの実施 (宿題：班のなかの各インタビュー・グループ活動)

8-4 インタビューのプロトコル化 (宿題：テープ起こし，一次データ：プロトコル・テキスト作成)

8-5 インタビューの二次データ化 (宿題：一次データから二次データへ)

データのテープ起こしによる一次データ作成は，労力は大変だが，ある程度機械的にできる。その後の段階，二次データ加工のプロセスと，何を意味ある語りとして選択するかが，質的研究の善し悪しの分かれ目になる。この部分が一番重要でもあり，一番教えにくいところである。ここでは，KJ法を使うためのカード化の準備というかたちで，誰でもある程度，順を追っていけば行えるような方法を工夫した。

<資料8-A> テクストの加工：一次データから二次データへ

一次データをもとに，研究目的に応じて何らかの手を加えることによって二次データ（二次テキスト）を作成する。もとのデータは冗長で雑多な情報を含むので，加工を加えることによって，「意味」あるデータになる。これは，フィールドの原石からダイヤモンドを磨き出すようなプロセスである。この一次データから二次データへの加工（変換）に際しては，何らかの一般化された方法があるわけではなく，目的によって異なる。内容や語りの様式別に何段階かに分けて加工を行うことがある。この加工，変換の仕方，読みとり方が，研究者の「眼力」の見せ所である。ここでは，誰でもできるマニュアルとして，比較的機械的にできる番号付けの方法を教える。

1 「二次データ」作成

- 1) インタビューの語り手と聞き手ごとに省略記号を決める。実名，仮名，アルファベットなど(A, B, C, …)。(このサンプルでは，Mが聞き手，Kが語り手)
- 2) 発話は，意味のまとまり，あるいは一つの発話の読点ごとに区切る。その区切りごとに，通し番号(1, 2, 3, …)を付ける。(インタビュー全体を通し番号にする)
- 3) 通し番号の後ろに誰の発話であったのかを記す。(1A, 2A, 3A…など。)

2 二次データのサンプル

1M：そうすると，やっぱり，4，5日というね，「混沌」という対象が都解の村だとして，4，5日という時間的な制約のもとに，数十枚の現場で取材したものを書き付けたものが資料としてあがってきて，それをこうやると，当然，時間的な制約もあって，こうやって配置してみると，こういうところが抜けてた

よな、と。やっぱり二次、三次の調査をこの点についてやらなきゃいけない、と、いうことが当然あるでしょうね？

2K：当然出てくるんです。それはね。ファンタスティックに出てくるかしらんですがね。これは根拠のあるファンタスティックなんです。

3K：それはね、そんなんでね、結局ね、この、これ出てきた。そのときは僕は、「これは混沌は乗り越えられる。それは自分をデータに押しつけることではないと。データに従うのだと」っていうことですわ。それを今から思うとひらめいたんですな。ひょっとするとね、混沌というお化けはね、解決できるかも分からない。

4K：それじゃ、トップダウン型のまとめ方しちやいかんのよ。ボトムアップのまとめ方をしなければならぬ。というふうなんです。

5K：さあそれから、私はこれは大喜びですわ。そんな簡単にうまいこといくかいな。数十枚をずーとやってたんです。そしたらそれに関する考えが見事にまとまった。急によくまとまった。さあそれからうれしくなったから、で1951年に。

6K：あと、1953年にはじめてヒマラヤへ行くことになった。そのときはもう、帰ってきたらデータね、この要領でやろうと、いう。

7M：行く前から決まってた？行くときにその、図書館カードを持ってた？

8K：そのときはね。あの、フィールドノートにね、書き付けるといふ、今までどおり。それを持って帰って、そして、しかるべきカードに移し替えようと思ってたんです。今から考えるとバカなこと考えてた。手間のかかる。ずいぶん帰ってから時間かかったですよ。

9K：なかにはアルバイトの人、お願いしてまで、汚いノートから書いてもらったものもあったけど。ここからここまで一枚分とうまく言っていないとね、これできない。それを丹念にやった。

10M：だけどそれやったら、ヒマラヤ行っただけが、何ヶ月かのデータ、全部収まった。それでそれをまとめたのが、・・・のなかで。

11M：あるチベット人の集落だけに私が集中的に滞在調査したんです。それはそういう自信があったからできたんです。

3 「二次データ」から「カード」へ

1) 「二次データ」をもとに、KJ法のためのカードを作成する（「カード化」）。

2) カードは、模造紙にはときの便を考えて、横7cm、縦3cm（24枚でA4）を使用する。

3) カードの右肩に、「年月日」「班番号」「話し手番号とインタビューの回数」「二次データの番号と発話者」（1-R, 2-A, 3-A, …）を以下のサンプルのように記入する。（この番号をつけることで、いつでも元の文脈を含んだ二次データに戻れるようにする。）

4) このカード化は、KJ法の分析のために行う。（この実習では、あまり多量のカードは初心者が扱いにくいので、トレーニングと割り切って、カードは約40-50枚でつくるように制限した）。KJ法を使用しない場合には、別の加工のしかたがあるだろう。研究者の仮説に合うデータだけを拾うような恣意的な選択をしないために、データをていねいにすべての語りを平等に見るためには、KJ法は手間がかかってもすぐれている。また、時間がかかるようにみえても、「手仕事」として思考を外在化させて順を追ってできるので、かえて時間が節約できる。ただし、集中できる時間と場所が必要である。

語りデータをカード化にするときの問題は、語りの文脈や流れが分断されることである。しかし、KJ法による創造的総合は、元あった意味連関をいちど壊すことにあるので、この欠点は長所と裏表である。この分断化の弊害を防ぐために、カード化したのちも、いつでも元の二次データ、あるいは一次データの文脈に戻れるようにしておく。また、録音テープや一次データの段階で、語りの全体をよく読み込んでおいてから、カード化することが重要である。

5) 意味ある「語り」の選択：何が意味あるかは目的によって異なる。意味内容（ストーリー）か、語り様式かなど、多くの観点があるが、今回は意味内容を中心にまとめる。

①意味内容中心：i) 研究目的に照らして、意味があると感じられる「語り」。ii) ストーリー構成上、要点

となる「語り」。iii) なんとなく気になる, おもしろい, 興味深い「語り」。

②語り様式中心: i) 語り方, 語り口の上で, 重要と感じられる「語り」。あいづちの打ち方など。ii) 繰り返し出現する「語り」。iii) 特徴的な文法の様式(「疑問形」「否定形」「仮定法」の使用など)。

3. 「カード」のサンプル

このサンプルでは, Kさんの語りのうち, KJ法のはじまり「フィールド・ノート」から「カード化」へという発想が生み出された経過にかかわる語りの内容のエッセンスを選択した。Kさんが使ったことばをそのままできるだけ生かして, 4枚のカードにまとめた。

カード右肩の記号は, 2002年2月9日に実施された1班によるKさんに対する1回目のインタビューの, 二次データ通し番号と語り手のイニシャルを示している。カードには要点しか書けないが, いつでも二次データへ戻れるように番号をつけておくのである。

02.2.9 1班13k

「混沌は乗り越えられる。それは自分をデータに押しつけることではない。データに従うのだ」と、ひらめいたんですな。

02.2.9 1班14k

トップダウン型のまとめ方しちやいかんのよ。ボトムアップ的まとめ方をしなければならない。

02.2.9 1班18k

(1953年のヒマラヤ)のときは, フィールドノートに書き付け, カードに移し替えようと思ってた。今から考えるとバカな, 手間のかかること。

02.2.9 1班110k

(カード化)したら, ヒマラヤ行った一回分, 何ヶ月かのデータが, 全部収まった。

9 質的データ分析の方法論3 報告書のまとめ方

(9回目配布資料：9-A.発表レジメ・報告書のまとめ方。 9-B.文献引用のしかた(「発達心理学研究」手引き))

9-1 発表レジメ・報告書のまとめ方 (資料9-A, 9-Bをもとに講義)

9-3 インタビューのプロトコル化 (宿題：テープ起こし、一次データ：プロトコル・テキスト作成)

9-4 インタビューの二次データ化 (宿題：一次データから二次データへ)。

9-5 インタビューのカード化 (宿題：二次データからカードへ)。

インタビュー実施とその後の手順には個人差があっても、KJ法実習までには、必ず各個人がカード化までの仕事を終える。

9-6 教科書「発想法」を読んでおくこと (宿題)

10 質的データ分析の方法論4 KJ法実習

(実習用具：KJラベル。クリップ。ゴムひも。模造紙。各種サインペン。図解サンプル)

(各自持参：各自が用意したインタビュー・データのカード。 1回目に配布した資料1-C.KJ法の方法。 「発想法」。 ボールペン)

10-1 KJ法実習 前半 表札づくりのしかた (講義と実習)

補講として日曜日1日(9時半-17時)を使って、集中実習を行う。

個人作業として、各自のペースでカードのラベル作りから図解化までを行う。教官が個人ごとに、各自の特徴にあわせて、とくに表札作りについて指導する。

10-2 KJ法実習 後半 図解化のしかた (講義と実習)

図解化のサンプルと、作業の早い人の例をもとに、図解化のしかたを具体的に説明する。個人差が大きいため作業時間は延長するが、図解を夜までに完成できない人は宿題。

10-3 各自でKJ法図解を完成して、個人発表のための考察を考える (宿題)

11 質的データ分析の方法論5 KJ法図解による個人発表

(持参するもの：各自がつくったKJ法図解)

11-1 各自のKJ法図解をもとに個人発表

学会発表の様式で、TAの司会で、各自がKJ法図解を順次発表して、質疑する。

A型図解化にひきつづいて、B型言語化の過程を口頭発表で行う。

自分で図解を苦労して作ったので、他の人が作った図解にも興味をもち、共有化するとともに比較しながら考察を考えることができる。

11-2 宿題として次週までに＜班活動＞各班の発表レジメを作成する (A4, 8枚)

12 研究発表会 各班ごとの研究発表と討論

(配布資料：各班の発表レジメ)

各班が提出した発表レジメに基づいて、各班の結果と考察を順番に発表。発表のしかたは、各班の工夫を尊重する。司会はT A。発表会の後の日程としては、以下の作業を宿題として行う。

- (13 班の全体報告書、および個人報告書の提出 約1か月後に締め切り)
- (14 お礼のあいさつ)
- (15 班の全体報告書完成)

まとめと今後の課題

本論では、「フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習」の実習カリキュラムを講義資料の一部とともに報告した。今後は、他の大学で試みられているカリキュラムを公開し、互いに学びあえる体制をつくることが望ましい。フィールドワークやインタビュー、語りデータの質的分析といっても、目的や理論的立場によって多様なので、一元化する必要はなく、種々の方法が試みられていいだろう。しかし、最低限これだけは必要という中核や共通する技法もあるに違いない。

いずれにしても、教えられるのは「型」や「技法」の初歩の部分だけであり、それだけではフィールドワークや質的心理学研究法にとって本当に重要な核心をつかんでもらえたとはいえない。しかし、実験や調査に「基礎」があるように、フィールドワークや質的研究にも「基礎」があるし、「型」から出るためにも教育カリキュラムを整備していくことは必須と考えられる。心理学の基礎教育としてフィールドワークや質的研究法が当たり前のように教えられる時が来ることを願っている。

この基礎演習は、半期という限られた範囲での過密スケジュールであり、課題も多々あったが、学生、院生ともに参加意欲が高く、熱心に演習に参画した。そして毎年、各班の力がこもった報告書が提出されており、それらは全体報告書としてまとめられてきた。本報告では、カリキュラムの説明だけで、学生たちの毎時間ごとのレポートの進展、K J法図解化、最終レポートの内容など、授業のもう一方の主体である学生の側からみた報告をまとめることはできなかった。学生レポートの一部はすでに発表したが(やまだ他 2000)、全体的なまとめは、今後の課題である。この「フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習」の教育方法やカリキュラムは試行錯誤も多く、未熟で反省点も多いが、批判や意見を賜り、より良いものにしていきたいと願っている。

謝 辞

本演習のカリキュラムは、T Aの大学院生、実習参画者の学部生、そして語り手になってくださった方など多くの方々の御協力によってつくられてきました。心より感謝いたします。

引用文献

- Atkinson, R. 1998 *The life story interview*. Sage.
- Burgess, R.G. 1984 *In the field: An introduction to field research*. Routledge.
- Flick, U. 1995 *Qualitative forschung*, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 2002 質的研究入門
——〈人間の科学〉のための方法論 春秋社
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L. 1967 *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*. Aldine Publishing. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳1996 データ対話型理論の発見 新曜社)
- 川喜田二郎 1967 発想法 中公新書
- 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ 2003 KJ法の原点と核心を語る：川喜田二郎さんインタビュー
—— 質的心理学研究2 新曜社 (印刷中)
- 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 2001 心理学研究法入門 東京大学出版会
- 無藤隆・やまだようこ・麻生武・南博文・サトウタツヤ (編) 2002 質的心理学研究1 新曜社
- 尾見康博・伊藤哲司 (編) 2001 心理学におけるフィールドワークの現場 北大路書房
- 佐藤郁哉 2002 フィールドワークの技法 新曜社
- Sliverman, D. (Ed.) 1997 *Qualitative research: theory, method and practice*. Sage.
- Silverman, D. 2001 *Interpreting qualitative data: methods for analysing talk, text and interaction*. 2nd.ed. Sage.
- 下山晴彦・子安増生 (編) 2002 心理学の新しいかたち：方法への意識 誠信書房
- 須藤健一 1996 フィールドワークを歩く 文化系研究者の知識と経験 嵯峨野書院
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一 (編) 1998 人間科学研究法ハンドブック ナカニシヤ出版
- 箕浦康子 (編) 1999 フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房
- やまだようこ (編) 1997 ^{フィールド}現場心理学の発想 新曜社
- やまだようこ (編) 2000 人生を物語る 一生成のライフストーリー ミネルヴァ書房
- やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) 2001 カタログ^{フィールド}現場心理学 金子書房
- やまだようこ・地見元博・日根野健・張貞京 2000 「京都における伝統の継承と生成」を^{フィールド}現場の語りから学ぶ——フィールドワーク基礎演習の試み 教育方法の探究3, 82-96.